



TITLE:

北ボルネオの星名と説話

AUTHOR(S):

野尻, 抱影

CITATION:

野尻, 抱影. 北ボルネオの星名と説話. 天界 1942, 22(256): 322-324

ISSUE DATE:

1942-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168447>

RIGHT:

北ボルネオの星名と説話

Star-Names of North Borneo.

野 尻 抱 影 *Hoei Noziri.*

私は「科學知識」の七月號に『南方新領土の星名』として、まだ覺えないマレー語の智識で、オリオン・北斗七星・プレヤデス・ヒヤデス・北極星その他の星々や金星の南方名に就き最初の紹介と考證を試みて置いたが、その後、平塚淑子氏の御厚意で入手した説話により、北ボルネオ地方の星名をここに書いてみる。「科學知識」發表のものと併讀して下されば幸ひである。

1, オ リ オン

ボルネオの原住民は、島内を流れてゐる河川を交通路として、遠くもない旅行をするだけなので、星により方角を案ずる等といふ必要はないが、しかし重なる星には相當通曉してゐて、それらを結んでは人間・動物その他の物の形に擬し、その名で呼んでゐる。又、部族によつては星の觀察により、稻 (Padi) の播種季節を定めてゐる處もあるといふ。

さて、ダイヤク族の一部のクレマンタン族は、“Pegasus の大方形”のことを“パライ (Palai)”と呼ぶ。これは稻を容れて置く穀物小舎のことで、やはり形の似寄りから來た呼稱である。

昔、このパライ星座の娘が、ラファーン (Lafaang) といふ人間の若者と戀に落ちて、天上へ招び上げたが、そこの習慣が下界のそれとは大いに相違してゐることをくれぐれ注意して置いた。父パライは娘の願ひを許して、ラファーンと娶はせ、兩人を同居させることにした。ところがラファーンは妻の戒めにも無頓着で、まづ食物は箸で口へ運ばなければならないのを、いつも戒めのやうに指でつかんで食べて、第一日から妻を失望させた。

翌朝ラファーンは稻田を作る爲めに、ジャングルを切り拓くやう言ひつけられた。その時も妻は、天上では樹を伐るのに斧をただその樹の根もとに置くだけでよろしいと教へた。しかしラファーンは、地上でやりつけてゐた通りに、斧を揮つて樹の幹へ打ちこんだ。ところが、いくら満身の力をこめても樹には何も痕もつかないので、呆氣にとられてゐた。

翌日父親パライは、ラファーンを連れて行き、自分のやり方に倣へと言ひつけた。若者がジャングルの草に蹲まつて見てゐると、パライは伐らうと思ふ樹の根に斧の刃を向けて置く。すると間もなくその樹はどさりと倒れた。ラファーンはその不思議に驚いて逃げ出さうとして、妻に叱られた。

しかし、その翌日ジャングルへ出かけると、ラファーンは、もう前日のことは忘れて、斧を樹の幹に打ちこんだ。すると、天上の習慣を破つた罰で、父親が

近い處で伐つてゐた一本の樹がラファーンの方へ倒れて來て、その左腕をもぎ取つてしまつた。

これですつかりおびえ切つたラファーンは、妻の留めるのも聽かず、下界へ歸ると言ひ張つた。もう子供が産まれるのも近かつたが、妻も仕方なく別れることに決心して、夫に甘蔗の莖と、バナナの根を渡し、これは地上に投げ出して置けば生へるからと教へてから、長い夢を傳はらせ下界へ降りて行かせた。ラファーンの足がまだ大地にとどかない中に、空で赤兒の泣き聲が聞えたが、もう戻ることは出来なかつた。

ラファーンが下りたのは、上バラム地方のティカン・オルムだつた。そして甘蔗とバナナを植えるのに、又しても妻の言葉を忘れて、叮嚀に土を掘つて植ゑた。その爲め、今でもその土地には丈の高い草ばかりが伸びてゐて、食用にならないと言ふ。

やがてラファーンは死んだが、天上には今もその姿が残つてをり、名も彼れの名で呼ばれて、嘗て天へ昇つた人間の若者とその不運とを物語つてゐる。この説話を原住民から採集した學者は、Lafaang は西洋でいふ Orion と同じ星象を言ふもので、たゞ左腕のない人間に見られてゐると註してゐる。

2. プレヤデス、ヒヤデス、オリオン

次ぎは北ボルネオ、テンパズク地方のビヤサウ部族（ドリスン族）に傳はつてゐる説話である。

昔、この地方の常食はタビオカと、カラディウムと豆とであつて、まだ稻を作ることを知らなかつた。或る時、村人がかういふ穀物を植ゑつけて、その周圍に垣を結び、幾日か後に除草に行つてみると、野豚が這入りこんで、さんざんに荒した後だつた。人々は落膽して家々へ歸つた。

ところで、その中の一人が、曉方に見た夢に、老人が現はれて、男が作物を野豚に喰べられた話をする、と、“それなら、垣のへりにバネ仕掛けの^{わな}鼠を造るがいい”と教へてくれた。それで男は朝飯を終ると、畑へ出かけて行き、夢の告げの通り、鼠をかけて置いた。

それから4日目に行つて見ると、果して一匹の野豚がかかつてゐた。しかし、もう腐つてゐて、食べられさうもなかつた。男が杖で突いてみると、豚の首が胴から離れ、下顎と齒も首から抜け落ちてしまつた。その晩又も夢に若人が現はれて、“鼠はどうした”と尋ねたので、“野豚が一匹かかりましたが、腐つてゐて口にも入りませんでした”と答へると、“お前は杖を持つて行つて、豚の首を突いてみたか”と言ふ。“その通りにした”と答へる。“それでよろしい。今年は一つ稻を作つてみるがいい”と言つた。それを手に入れる方法を尋ねると、“よその部落で種をガンタン(1ガンタンは2升4合)も貰つてくれれば十分だ”

と教へてから、更にかう言つた——。

“お前が杖を野豚の頭につつこんだ處に、ポチポチがあつたらう。それをブルブル (puru-puru) と呼ぶことにしよう。下顎はロル (ror) としよう。パネ仕掛けの良 (註：原名を欠く) も、その名で呼ぶことにしよう。そして残らずを空へ上げて、星にしよう。”

そこで男は、“しかし、稻を蒔く季節はいつでせうか”と尋ねると、老人は、“それには、日が暮れてすぐ、パネ良と、ロルと、ブル・ブルとが空に出るのを見なければならぬ。ブル・ブルが空に四半分ほどの高さに昇つたら、それが稻を蒔く時だ。ブル・ブルは一番先きに昇る。次ぎがロルで、最後にパネ良が昇る”と教へてくれて、初めて夢が覺めた。

男が出て見ると、若人の言葉通りに、ブル・ブルもロルもパネ良も星になつてゐた。今日でもその地方の部族は、この3種の星が日没後間もなく(7時頃)昇るのを見て、稻を蒔いてゐる。

かういふ説話であるが、しかし、これだけでは“puru-puru”、“パネ良”、“ror”が何の星をさすとも判明しない。ところで、1の説話を傳へるクレマンタン族は、プレヤデス星團を“井戸”と呼び、ヒヤデス星團を“豚の顎”と呼んでゐる(原名不明)。即ち Taurus では牛の顔に當る V 字形を豚の顎の形に見たので、容易に合點が行くだらう。で、上記の“ror”をもこれと考へると、“pur-pur”がプレヤデスであることは間違ひない。説話の中で、ポチポチ(marks)になつてゐること、豚の顎よりも先きに昇ること、更に太平洋諸島の民族初め南半球の殆んど全部が北半球に於けると同様、プレヤデスを播種の季節を知るに用ひてゐる事實(ホグベン:「市民の科學」前卷參照)は、何よりもこれを立證してゐる。但し、“puru-puru”の語原はまだ不明だが、ミンダナオ島で同じ星團を“poyo-poyo”と呼んでゐるのと關係があり相である。

さてかう決定すると、残る原名不明の“パネ仕掛けの良”なるものは何だらう。これもミンダナオに“bintang balatik”といふ星があつて、譯せば“豚良の星”のことで、Orion をさすのだと言ふ。それなら“豚の下顎”(ヒヤデス)よりも遅れて前後に昇るといふのに合ふわけで、原名も大體これに近いものかも知れない。たゞ、豚の良そのものの形が判明しないので、それが三つ星をいふのか、謂ゆる酒旆星か、或ひは三つ星を圍む大四邊形であるかは今のところ斷定できない。

それにもう一つ問題に残るのは、土地は不明だが、bintang belantek, (lantek) もパネ仕掛けの良の意味である。そして、この“良の星”はヒヤデス星團の V 字形をさすものだと思ふ。附記して後日に待つ。(17. 6. 23)